2022年、SDGsに向けて…。

世界中が震撼している新型コロナ。コロナ感染症収束は世界中の誰もの悲願。SDGsは、世界中の様々な国での環境問題（気候変動）・貧困・紛争・人権問題などを2030年までに解決しようという「持続可能な社会」の実現を目指す。「貧乏で困っている人を無くす」「差別のない社会を作る」「環境を大切にする」。SDGsの「誰一人取り残さない」という理念こそ、新年にあたり熟考したい。ここに実践事例を紹介する。

自然エネルギーでボートを動かす！

環境に優しい電動船と給電施設の普及を目指す「ゼロエミッション・マリーナ」モデル基地の内覧会が、11月10日、堺市の旧堺港で行われた。国内初の試みで、太陽光や風力で発電した電気をバッテリーに蓄電し、桟橋に備えたワイヤレス充電器で電動（EV）船に電気を供給する、まさに海の充電スタンド。また、次世代EV操船システム搭載艇や、目的地までの航行や離着岸を全自動化する実験艇が紹介された。検証実験のデータを基に、船体や電源ユニット、自動操縦プログラムに改良を加え、普及に向けた法的な規格作りや利用方法も探って行く。

EV船の先進地・北欧では小型ボートの普及が著しく、大型のフェリーや観光船も活躍している。EV化が遅かった日本でも、今年4月からのEVタンカーの運航が発表された。一方、小型EV船の実用例は、沖縄県石垣島のグラスボート、台湾高雄市のソーラパネル搭載の遊覧船、そして試験運行のEVボートのみという状況だ。新たな試みに、広島県の離島での自律航行小型EV船を用いた日用品の即時配達とゴミ回収の実証実験がある。これが話題となり、全国各地に実証の場が広がっている。クリーンで静かなEV船に電気を供給するゼロエミッション・マリーナ。

持続可能な未来を見据えた、新たな事業の船出だ。

▶自律航行小型EV船。桟橋のワイヤレス充電器がボートに非接触で給電中。